# 方言の発想法

藤原与一

## 一　思いかた述べかた

発想法とはどういうものか。これに正面から答えることは、私にはできない。ここでは、発想法というものを、ものごとを思って述べる「思いかた述べかた」としておく。

心に思うこと考えることがおこって、それをことばにする。その時、その思い・考えに、思いわけようなり考えわけようなりができる。その思いわけよう・考えわけよう――（一口に言って「思いかた」）――が、まず文字どおりの発想法であろう。さて、そのような「思いかた」に応じて、当然、それなりのことばがつかわれる。つまり「述べかた」がなされる。発想法は、じっさいには、ことばの述べかた――述べられているありさま――についてとらえることができる。ことばでの述べかたによらなくては、発想法を客観的にとらえることはできないであろう。ここで私どもは、発想法を、「思いかた述べかた」と考えることができる。

方言生活の中には、どのような発想法が見られようか。私は、方言生活の中に、特殊な発想法があるなどとは言おうとしない。方言の中の発想法もまた、国語の中のしぜんの発想法にほかならないから

である。

方言の発想法を、多く、こまかく見ていくと、ここには、国語の発想法のしぜんのすがたが、限りもなく見いだされる。国語の発想法はこんなものなのかと、よく納得させられることが、じつに多い。私は、国語の発想法を具体的に把握しようとして、方言の発想法を見る。

## 二　方言の世界

日本語の現実を、諸方言のむらがりあう世界――そういう統一世界――にみとめて、「日本語の現実を『方言の世界』に見る。」と言おう。

方言の世界に、国語の発想法を見る。方言の世界は、国語の発想法の咲き匂う花園である。

一例、比喩表現の発想をとりあげてみても、方言の世界に、国語の発想生活の、じつに多彩なおもしろみを見いだすことができる。「いそがしくて、まったく、やりきれない。」ということを、方言人は、「マイガ　マエン。」（舞が舞えん。）などと言う。（――「テンテコマイ」などということばも、ここに思いあわされる。）比喩の思いは、いろいろな角度から、きわめて柔軟にきり出される。

次下には、方言の世界について、特にあいさつ表現の生活に眼をそそぎ、ここで、方言生活上の発想法の、端的にとらえられるのを、問題にしてみよう。

## 三　左様ナラバ

別れのあいさつに、「サヨナラ。」ということを言う。諸方言上では、これが、

○サイナラ。

などともなっている。「サ様ナラバ。」が「バ」略となって、口ことばらしい、くだけたものとなっては、やがて、「サヨナラ。」→「サイナラ。」の音訛も、当然のように起こったことであろう。

さてこの「サ様ナラバ」系の言いかたを見ると、その下の「どうどう。」ということば、たとえば「これにて御免仕ります。」というような口上が、省略されている。もともと、「サ様ナラバ」でやめた当時は、言主たちに、あいさつの口上をうち切った意識があっただろう。今日の「では。」「ヂャー。」（「ヂャー　イズレ　マタ。」）などを言った時のようにである。そのような叙述中止が、習慣化した。これは、叙述中止の発想法をとるようになったということであろう。中止して、あとの言いかたを省略したのでも、あいさつことばとしては、よろしいと、考えたのである。叙述中止法を採った発想法は、「省略」発想法とも言うことができる。

「サ様ナラバ。」だけでとどめるとなると、この表現意識に即応して、これだけのものに、表現完結のしるしの文アクセントが、習慣化し固定するようになった。あとに他のことばがつづく時には、「バ」の部分に、いろいろの抑揚波が起こりうるが、「サ様ナラバ。」の言いきりでは、まず、「バ」に、多くは、下がり調子が、固定的となったであろう。「バ」略となって「サヨナラ。」形が成就すると、これには、「サヨナラ。」というようなものもできた。この場合は、「ラ」で調子が上がっている。が、これはこれで、習慣的な一定形式になっているわけである。文アクセントが固定するように

なったころには、もはや、その叙述中止の「省略」発想は、発想法形式として、安定しているのである。この安定の中で、「サヨナラ。」→「サイナラ。」のような変形も、自由におこなわれていく。

「アバ　ヨ。」などの別辞が、「さらば」系のものとすれば、これは、「バ」を省略はせず、そこへ「ヨ」文末詞をそえて、それで、一まとまりの別辞を仕上げたものである。「ヨ」のような、よびかけ性のはっきりした文末詞をつけそえれば、その前のものが、どんな省略形であろうとも、そこにたしかに、一文表現のまとまりはうまれる。さて、「アバ　ヨ。」となったものは、また、しぜんに変化もしていったらしい。「アンバ　イー。」などとあるのも、「アバ　ヨ。」の変形である場合が、なくはないと思われる。

「バ」をおとす・おとさないは、表現気分あるいは発想の、一つの大きな、注目すべきちがいでもあったろう。その、おとした方の発想法は、国の西部系の地方に多く見られ、おとさない方の発想法は、だいたい、国の東部地方に見られる。そうして、「バ」のある方では、「サヨウナラバ。」の、長い言いかたは、していない。（「バ」を言うくらいの所では、短い言いかたをしているということである。）発想法の地方差が、こうしてみとめられる。

ところでここにおもしろいのは、西の九州にも、「バ」を言う形の見いだされることである。たとえば、野村伝四氏の「大隅肝属郡方言集」には、

サンバサンバ　　家人が旅に出る折、後に残る老人などが、去る人を手招ぎしつゝ唱へた言葉。意味不明。

と出ている。薩摩の甑島に、「サンバ。」「アンバ。」（さようなら。）がある。（北条忠雄氏・上村孝二氏も報告していられる。）山口麻太郎氏の「壱岐島方言集」にも、

サンバ　　晩の挨拶。さようなら。「――な」「――しうか」が見える。こういうところからすれば、もともとは、国の東西に広く、「～バ。」形の別辞がおこなわれていたかと察せられる。近畿三重県下の方言文献にも「あばな。」「あばあ。」の見えることなどからするのに、むかしは、この種の言いかたが、国の中央にも東西の諸地方にも、広くおこなわれたことかと察せられる。（ただ、「サ様ナラバ。」はどうであったか、知りようがない。）そうあってもよかったのだろう。「さらば」などは、かんたんに言って、標準語形だったろうからである。「～バ。」が広く東西におこなわれるうちに、西部系の地域は、しだいに「バ」をおとす方におもむき（発想の転移である）、東部系の地域は、主として、「バ」を保留する発想に生きた、とされようか。

東部系の地域と言った場合、中部地方以東をさしている。中部は北陸でも、たとえば加賀の白峰方面で、

○アバ　イー。　　さよなら。

などと言っている。それでいて、中部地方では、たとえば長野県下でも、「南佐久郡方言集」（「方言」一ノ三）など、

サイナ　　別れの詞。さようなら

と、「バ」略の形を示している。「バ」の有無の分布を、単純にわり切ってうけとることはできないようである。西の九州の肥前五島には、「サラ。」というのがあるらしい。これなど、「サラバ。」の「バ」略か、「サイナラ。」などの縮約形か。

方言人の発想は自在である。思いもおよばぬような省略・縮約をもやってのけ、また、意外とも思われる所で、意外とも思われるも

のを示している。方言の世界の発想法は、そのように、自在で多彩である。「サ様ナラ」に対して「それナラ」も起こしていることなどは、多く言うまでもない。「サ様」に対する「ソレ」は、ことばの時代差をすぐに感じさせる。人は、当然の要請として、「サ様ナラ。」から「ソレナラ。」を求めもしたであろう。「ソレナラ。」を作るとまた、「ソイナラ。」「ソンナラ。」「ホンナラ。」などと、諸変形を作った。「ソイナー。」は薩摩の「さようなら。」である。（この方では、「サヨナラ。」も「サヨーナー。」などと言っている。）

## 四　まづ

東北地方ならびに新潟県北に行くと、「マンヅ」「マンツ」のようなのが、別辞につかわれているのを、多く聞くことができる。小さな子たちも、遊びおわってたがいに帰る時、

○マンツ。

などと言っている。「まづ」がもとなのであろう。子どもの「マンツ。」など、じつにかわいく聞こえる。

○ンデ　マンヅ。　さよなら。

これは宮城県下の一例、

○ンヤ　マンヅ。　〔中等の言いかた〕

○ンダラ　マンヅ。　〔上等の言いかた〕

これは秋田県男鹿半島での例である。

「さよなら。」の別辞を「まづ」と発想するのは、「さらば」と発想するのとよく似ていよう。「さらば。」の生えた土壌には、「まづ。」が生えていてもよいはずと思える。「さらば」と「まづ」とは、ともに修飾語句、人間の眼飾で言うなら、ともに「かざし」に当たる。しかも、右の両者は、私どもに、同種語感のものであることを、感ぜしめはしないか。時代性も同じと見られよう。両者は、同式同位の発想法に属するものと見ることができるようである。

## 五　来るよ

別辞の発想法としては、「かざし」ことばを採るのではない言いかたの領野が、さらに広く見わたされる。

沖縄本島の「クー　ヨー。」〔対等者への言いかた〕は、「来るよ。」――（また来るよ。）――と、表現者の表現意図の実内容を言ったものである。ちなみに、この方では、目上の人に対しては、「メンシェービリ　ヨー。」と言う。（なお、ここに付加するなら、宮古島に「ビラット。」があり、これは「もう行きましょうね。」との「辞去のあいさつ」であるという。やはり、実内容を言っている。）――「イナー　ヨー。」（「去なあヨー。」）などと言う所は、関西内にも、なくはない。

薩摩半島南辺では、同等以下への「さよなら。」として、

○ノッヂョ。

と言うのを聞いた。これは「後よ。」であるとすると、また、実内容を言ったものである。それが、「来る」や「行く」などの、動詞によるものではなく、端的に、「後」という名詞によるものであるのは、思いかた述べかたとして、注目される。なるほど、「後よ。」でおもしろい。（もとは、「後にお目にかかりましょう。」であったにしても、「後よ。」と言えば、「お目にかかるのは後よ。」と

いうことになる。）

さて、以上の諸例を見ると「来るヨ。」「後ョ。」と、文末詞「ョ」をよくつかっている。「ヨ」は、このようなところに、このようにつかわれてふさわしい文末詞であることが理解される。さきには「アバ　ョ。」があった。

「ョ」の使用の東西両方一致と軌を一にして、「後！」と、体言を投げ出すようにつかう発想法が、西とともに、東北内にもおこなわれている。（北条忠雄氏「国語の真相を覚めて——国語史と方言とをかへりみつつ——」方言研究第十輯　参照）「オノチ。」「オノッサマ。」（「お後さま。」さようなら。）が岩手県下にある。宮城県下に、「ノヂガダ。」「ノヅガダ。」「オノヂガダ。」（「お後かた。」）などがある。

同じく宮城県下でよく聞かれる

○オミョーニヅ。

などという辞去のあいさつは、「お明日。」との言いかたをしている。これは、「後」を「明日」と限定したものである。「お後。」などと「お明日。」とは、近縁のものとされよう。人は、再会を思うて、「後」とも思い述べやすかったし、「明日」とも限定しやすかったであろう。

「後」「明日」に関する言いかたが、右の東西両辺地のほかにはほとんど見いだしかねるようなのは、どうしたことか。諸他の地域に、これらが全然おこり得なかったものでもあるまい。そうは想像されるものの、これらの今日の分布が、こんなに微弱であるところからすると、やはり、このような発想法は、広くも、長くも、人びとの関心をつなぐことができなかったのだろうかと考えられる。習慣化した発想方式の栄枯となると、これはまた、ことにおもしろい討究問題となる。栄えていてよさそうに思える方式が、ふるわなくて衰退していることなどには、民衆感覚のふしぎなはたらきを、追求せしめてやまないものがある。

## 六　省略法と実内容提示

「省略」発想のさかんな傾向は、さきに述べてきたところで明らかであろう。別辞のあいさつことばを見ただけでも、方言の世界——という国語の世界に、「省略」発想法のいちじるしいことは、よくわかる。

「かざし」ことば（修飾語句）を叙述しただけで文表現を中止する、その「省略」発想法に対して、被修飾部分とも言うべき実内容を端的に提示する「思いかた述べかた」を、「実内容提示」発想法としておく。

ところで、この後者も、たとえば「お明日！」と言うのなど、一方から見れば、「では、」とか何とかの、「かざし」ことば、あるいは修飾法が、省略されているとも、見られないことはない。見られれば、これもやはり、一種の「省略」発想法によっているものとすることができる。こう見ていけば、省略法は、ずいぶん広汎にうけとられる。

ただし、「お明日！」などの場合はもちろん、「さらば。」のような場合でも、できあがった形式を利用する発言者たちに、もはや、何の省略の意識も、また叙述中止の意識もないことは、言うまでもない。おのおのの述べかたは、それぞれに完結しており、——そのことは、述べられることばの文アクセント形態によって保証されており、発言者たちは、一まとまりの完結体を表出する意識で、

これらのことばづかいを実現している。

## 七　あなたの

省略法のはなはだしさを、一つ、別種の例で見ていこう。

○アンターン。　　ごめん下さい。

これは、山口県下の訪問あいさつことばの一つである。これは、これとならびおこなわれる「アンタンデ　ゴザイマス　カ。」などとくらべてみる時、明らかに、極端な省略形であることがわかる。「アンタの」でうち切るところなど、ほんとに、あいさつことばはどんな形でもよいのだといったようなところがある。相手をあなたとよぶ、よびかけの気分さえ出せるなら、あとのこまごましいところはいらないといったようなところがある。すると、ここでは、よびかけ気分を出すことをもって満足する発想法がみとめられることになる。（――そういう気分の述べかたで満足する発想法が、みとめられることになる。）

右は、省略法の習例にちがいない。しかも、この省略形の、表現形式としての完結の様態は、「アンターン。」の、おわりの長呼と、文アクセントの後方高音継続方式とに明らかである。

## 八　アリャ

感嘆の場合に、よく、

○アリャ！　　あれ！

と言う。「あれは」であろう。「あれはどうどう。」の、あたまだけが採られている。これまた、「かざし」ことばによるものである。

○コリャ！　　と、猫や子どもを叱る常用文句も同種例である。いかにもこれで完結していることは、文アクセントに明らかである。

○ドリャ。　　どれ。

というのもある。私の郷里などでは、老女たちは、こう言って、用事・しごとにとりかかる。郷里では、「ドレ」はかならず「○○」型式に発音する。けれども、「ドリャ。」は、右のような文アクセントに発言するのがつねである。

叙述中止法が、一定方式として、規則的にもおこなわれることは、ここに見られるとおりである。省略法の、随所に、はなはだしくおこっているのを、私どもは、広くみとめることができる。

## 九　今日は　今晩は

日中のあいさつの、「今日は。」「コンチャ。」「チワー。」などは、また、「今日はどうどう。」という言いかたの、あたまを採っている。明らかな省略法である。「今日」の内容は言わないで、それでもって、「今日はどうどう。」のあいさつことばとしている。これは、こういう、省略の発想法である。（「今日は。」ではしょっても、これであいさつのことばになるど、人びとは、思いとっている。）

英語では「今日は！」を、「グッド　モーニング。」と言う。これは一挙に実内容を述べている。「グッド　モーニング。」とは、いかにも祝福のことばらしい。が、私どもの「コンニチは。」もまた、たしかに、これで、相手を祝福している。相手と、好感をとりかわそうとしている。

「今日は。」に対して、「今晩は。」がある。晩のあいさつこと

ばである。ところで、これには、東国地方に、

○オバンデス。

がある。「お晩です。」は、「グッド イーブニング。」に等しかろう。実内容を言っている。「オバンデス。」に並行して、「オバン。」もある。東国のこのようなのに類するものを、国の西部地方に求めれば、中国地方などの、

○バンナリマシタ。（晩になりました。）

などがある。（「お早うございます。」の「オヒンナリ（お日になり）。」は、北陸路にあり、四国東部にもある。）東西で、述べかたなり表現法なりがちがうのを、ここで見ることができよう。さきの「お明日！」という体言法を見せたのも東国であった。「お晩！」も東国のものである。

実内容を直叙する発想法がとられるにしても、国の東西で、

オ晩。 ←→ 晩にナリマシタ。

のように、実内容のえぐりとりかたがちがってくるのはおもしろい。

また注目するのに、「晩」に関しては、「オ晩！」の言いかたが成り立ち得ている。しかし、「今晩」に関しては、「オ今晩！」などの言いかたは成り立ち得ていない。また、「今晩デス。」の言いかたも成り立ち得ていない。「今晩デス。」がないことなどは、この「今晩」ということばの流行がおそかったのにもよっていようか。それはともかく、「オ晩。」と「オ今晩。」とをくらべてみると、音節数がちがい、音律がちがう。やっぱり、「オ今晩。」や「オ今日。」は、通常、できようがなかったのではないか。人びとの発想は、しぜんのうちに、ある適切な音律を好み、そこで、述べかたをえらび、述べかたをまとめてきたかと思う。（造語の場合も同じである。）

## 十 お早う

朝のあいさつ「お早う。」「オハヨー。」は、「早くどうどう。」だとすると、これまた、「かざし」ことばを採った発想法とされる。

「お早うゴザイマス。」は、その「お早う。」を、実内容を述べた形に定着させたものであろう。「オハヨーサン。」などと言うのも同巧である。

ところで、九州南部の、

○ハヨ メガ サメヤシタ。

などというのは、「けさは早くお目がさめましたね。」と言うのであるから、まさしく、「早く」の下の「どうどう」――実内容を言っている。祝福のことばにちがいない。

さてその祝福の気もちは、すでに「お早う」と言っただけでもよく表現できる、との、しぜんの表現心理から、発想――→「思いかた述べかた」は、「オハヨー。」でうち切る言いかた（思いとりかた）にとどまりもしたのであろう。

九州南部の、

○ケサ マダジャイモシタ。（けさはまだでございました。）

などという、「お早う。」のあいさつことばは、これらなりに、実内容を表白している。そうして、「けさはまだでございました。」（種子島などでは、「キョーワ メッカリモーサン。」《きょうはお目にかかり申さん。》）は、「早くお目がさめましたね。」な

どというのとは、こと変わった発想法のものであることが明らかである。一方は、積極的に、進んで出て、相手の早い目ざめを祝福している。一方は、謙虚の情をもって、やや消極的に、しりぞいて言っている。発想のおもしろい相違である。

## 十一　段々　大きに

「ありがとう。」の感謝を言いあらわすのに、「ダンダン。」と表現する所は、中国地方に多い。出雲などでは、「ダンダン　ダンダン。」などと、はなはだしい重複の言いかたも、よくしている。「ダンダン。」はもと「段々」で、副詞である。ここには、副詞の、特殊特定の文表現になったもの、固定形式が見られるわけである。

これをこうしたのは、あいさつことばの発想法自体であった。「段々にありがとうございます。」などというのから、発言者は、苦もなく「段々」だけをとってきて、この省略法で、感謝の発想を充足させたのである。

ややものたりなく思うようになったむきは、あるいは、もっといねいに言いたいと欲するようになったむきは、「ダンダン　ダンダン。」と、強調累加をおこないもしたのである

近畿四国では、「ダンダン。」に対応する謝辞として、「オーキニ。」が頻用されている。中国では、「オーケニ。」が、時に（だいたい、稀に）、「オーケニ　オサヨーデ、……。」（大きに、お左様で、……。）などと、古老男子たちに用いられたりもしていて、「オーキニ。」の、謝辞となったものは、大勢として、おこなわれていない。それにしても、謝辞「オーキニ。」が、「大きにどうど

う。」とあるはずのものの、はじめの修飾語句であることは、中国地方の右の用例を見ても、明らかであろう。

「オーキニ。」は、国の東部地方の謝辞にはなっていないようである。関西でも、中国地方は右のようであるとすると、「オーキニ。」の、謝辞発想の、方式としての固着は、比較的新しいことなのではないかと察せられる。

「段々どうどう。」「大きにどうどう。」の、「段々」や「大きに」を採って、謝辞一般の完結表現法としたのと同様に、「再々にどうどう」の「サイサイニ」を採って、これをまた、「ありがとうございます。」表現法の完結体としている。この発想事例は、広島市北郊などで見いだし得ている。

共通語では、「ドーモ　アリガトー。」の、「ドーモ」だけを採って、これを「ありがとう。」にする習慣ができている。

## 十二　諸種の発想法

方言の世界にあいさつ表現を見るとなっても、あいさつの生活の領域は広く、事象は多い。以上は、その一部にふれたものである。

ここでなお、あいさつ表現にはこだわらないで、方言の広い世界に、諸種の発想法を見ていくことを、すこしくこころみておこう。

近畿弁では「知らなかった」の言いかたを問うても、「シラヘン」などと答える。（服部敬之氏との談話による。）問いのことばは過去形になっているが、答えは現在形である。ところで、考えてみるのに、このように「シラヘン」（知りはせぬ）と答えるのも、「知らなかった」ことの答えかたとして、たしかに一理を得ている。ここには、「シラヘン」と、過去事を現在法で思い述べる発想

法がある。

せんだってのことである。明石駅の構内に立っていると、四、五才の孫の男子をつれたおばあさんがはいってきた。なぜか、おばあさんは、財布をいらっている。それを見あげた孫のことばは、

○ナンカ　カウ｜キ　アル｜ンカ。

何か買う気があるのかね。

であった。「買ウ気　アルンカ。」の「気」の下には、「ガ」がない。「が」格について、「ガ」を表出するとしないとでは、表現気分がちがおう。「ガ」を表出しない所では、「ガ」をあらわにはせぬのに相応した、簡略気分の発想があるとしてよかろう。

右の一文をさらに見るのに、幼孫の、祖母に対することばづかいは、ていねいではない。しかし、これはこれで、祖母に対する、心おきなしの、親密感をあらわしていよう。そういう、特殊特定の発想法が、ここにみとめられる。一般化して言えば、敬卑親疎の諸表現法別は、発想法の分化としてうけとることができる。日本人はこの方面の発想生活に敏感であるとしてよいのだろう。

## 十三　発想法の世界

方言の世界に日本語の発想を見ていけば、日本語に生きる人びとの、日常の発想と論理とを、克明に見ていくことができる。

方言に見る日本語の発想法は多彩である。これについてのかんたんな推断はゆるされない。

発想法研究の発展性は、いろいろに考えてみることができる。まず、根本的には、造語法との関連が考えられる。いったい、発想して、文表現をうむことは、造文発想とも言うことができる。これに対して、造語は、造語発想とも言うことができる。「発想」に思いいたれば、造語法も造文法も一つのものであることがわかる。

発想法は、分化力・造型力にむすびつけて考えることができよう。日本人は、方言の世界で、どのような発想法を示しつつあるかを、高度にまで究明することができたら、日本人の分化力・造型力の一般的叙述が可能になろう。

日本人の発想法に、日本人の論理がみとめられる。日本人の論理性の解明のためには、方言の世界に日本語の発想法をたずねる作業を、緻密におこなっていかなくてはなるまい。方言の世界に、日本人の発想と論理とをたずねていって、そこで、日本人の、日本の科学や文学をうむ能力を見つけることができる。

以上は、私の「発想法研究」の一片にすぎないけれども、それでいて、ここに付言したいことがある。それは、方言の世界に執するかぎり、何をテーマとしても、すべての研究は、みな、『方言』の研究として、一つのものになってくるということである。――これもまた、今の場合、発想法研究の立場から言えば、発想法研究の発展性と言うべきものであろうか。（三七・一・五）

――広島大学文学部助教授――